

幸田露伴『風流佛』考

——（珠連は如何お辰は如何になりしや）をめぐって——

岡 田 正 子

はじめに

『風流佛』は、明治二十二年九月『新著百種第五號』吉岡書籍店から刊行された。この作品にたいする同時代評で、肉食頭陀（石橋忍月）が、

新著百種第五號風流佛 肉食頭陀

妙味佳香言ふ可からず⁽¹⁾

としながらも、

殊に其結末に至り、珠連は如何お辰は如何になりしや、是れ吾人が大に不平を鳴らし非難せんと欲して非難する能はざる所なり何となれば著者は隴氣の筆を以ッておぼろげに結たればなり否吾人は其隴氣中に如何なる妙味あるや熟考未だ著者の真意匠を思ひ出たさざればなり、（略）著者若し吾人の不敏を憐まは請ふ團圓の「歸依佛御利益」を詳説せよ、⁽²⁾（傍点は岡田）

と問題を提示しているのがみられる。忍月は（妙味佳香言ふ可からず）と褒めながら、（珠連は如何お辰は如何にな

りしや」と「珠運」「お辰」の恋がどうなったかわからないままであることを批判し、その点において、團圓の「歸依佛御利益」の説明が不足だと言っているのである。初出時における反応は、その作品に対してもっとも新鮮な感覚でとらえられたもので、しかも別号であることは拘束のない自由な立場なので素朴な気持ちを率直に述べていると考えられる。

そこで、本稿は、この批評が適切かどうか考察を試みたい。

その方法として「團圓」の、

一村の老幼芽出度とさゞめく聲は天鼓を撃つ如く^③

表現と、「團圓」の後方にある四回目の「風流佛」表現とに着目する。この二表現に注目する理由は、「一村の老幼芽出度とさゞめく聲は天鼓を撃つ如く」に着目するのは、老いも若きもこぞって「芽出度」^④というのは何故か、その理由を探りたいと考えるからである。四回目の「風流佛」は『風流佛』には次にあげる四回の「風流佛」表現があり、

一回目 莊嚴端麗あり難き實相美妙の風流佛、^⑤

二回目 優然として長閑に立る風流佛^⑥

三回目 頭を上れば風流佛悟り済した顔、^⑦

四回目 是皆一切經にもなき一體の風流佛、^⑧

このうち、四回目の「風流佛」表現は前三回の「風流佛」表現と些か趣を異にすると考えられるからである。なぜなら、三回目まではいずれも製作者「珠運」が「風流佛」とともに存在していたが、四回目「風流佛」は、「珠運」が「雲の上に行し後」の、そのまた「其後」の製作者不在の話として、『風流佛』の「團圓」の終り近くに出てい

るという特異性に注目するからである。

「團圓」にあるこの二つの表現を主軸にして、初出時の忍月の批評が正鵠を射ているかどうかの考察を試みたい。それに伴って「團圓」の意義をも明らかにしたい。

註(1)『國民之友』第六十五號 明治二十二年十月十二日 (三六)～(三七) 第五卷 (五三八)～(五三九)

(2)『國民之友』第六十五號 前掲 (三八) 第五卷 (五四〇)

なお(1)(2)は『露伴全集』附録 一九七九年八月一七日 岩波書店にも所収。
一四七～一四九頁

(3)『露伴全集』第一卷 七七頁

(4)『日本国語大辞典』小学館によれば、

「目出度」「芽出度」などの字をあてることもある。

立派である。見事である。すばらしい。

非常に尊い。ありがたい。

物事が望ましい状態で喜び祝うに値するさま。喜ばしく結構である。

(5)『露伴全集』第一卷 六六頁

(6)『露伴全集』第一卷 六九頁

(7)『露伴全集』第一卷 七五頁

(8)『露伴全集』第一卷 七七～七八頁

一、「珠運」「お辰」の恋の結末の解明において

初出では、「第十 如是本末究竟等 下 戀戀戀、戀は金剛不壞なるが聖」の終りには、

彫像が動いたのやら、女が來たのやら、問ば拙く語らば遅し、女の又玄摩訶不思議⁽¹⁾

とあつて、作者は「珠連」「お辰」の恋の結末を明らかにしていないようにみえる。「動いたのやら」「來たのやら」と曖昧に表現しながら、「摩訶不思議」で終わつたままでは明解でない。著者による結末が明瞭でない故に様々な読解の可能性が生じ、次にみられるように様々な考察がされてきた。

像の動いたのやら、女の來たのやらつひにわからず了ひに、玄又玄不思議に筆を斷つたのが作者の考であつたらう。實のおたつがそこに來たと見るのは、作者の狙いをそらした事であらう。そのあとの團圓に二人の夫婦姿を見るといふは實に就いていふでなくして「戀愛」そのものに就いていふだけである。⁽²⁾

この奇蹟の中心になるお辰が現実のお辰か、木像のお辰の化身かといふ穿鑿はこの作品にとつて大した意味をもたないであらう。といふのはこの昇天の帰依仏は現実的な意味をもつのではなく、むしろ恋愛の象徴化、人格化ともいふべきものであり、「帰依仏の御利益眼前にあり」といふ一句もその意味に解すべきだと思はれるからである。⁽³⁾

現実における悲劇的破局を天上の恋に変質昇華させ、更に一切衆生済度の帰依仏といふ理念にまで到達した。⁽⁴⁾

破れた戀を前にして、〈略〉藝術の力をかりてこれを不朽にとゞめようとした〈略〉その刹那美神に生氣が生じて、去つた戀人が彼のもとにもどる。藝術家の一心が美神を生かしたのである。⁽⁵⁾

露伴にとっては珠連お辰の現実の運命などはどうでもよいので、珠連が性根こめて刻み上げたお辰の裸像に、お辰の魂が乗り移り、ここに風流仏が完成したことを描くのがその目的であつたに相違ない。⁽⁶⁾

珠運は一心不乱に恋人の像を彫ることで風流仏の来臨を得、風流仏によってこの世の恋の苦悩から救われる。⁽⁷⁾

二人の恋は「天上の恋に変質昇華」した。或いは「藝術家の一心が美神を生かした」、「お辰の裸像に、お辰の魂が乗り移り、ここに風流仏が完成した」、「風流仏の来臨を得、風流仏によってこの世の恋の苦悩から救われる」このような見方が『風流佛』には相応しいものといえるのであろう。だが、一方否定されているようにみえるが「實のおたつがそこに來たと見る」「團圓に二人の夫婦姿を見る」という見方の可能性が全くないとはいえないことも、示されているのではなからうか。

これらからもうかがえるように、各立場にたつての様々の見方があり、夫々に頷けるものであつて多種多様の読みの可能性があることをしめしている。

だが、では現実に「珠運」「お辰」の恋は成就したとみるのか、しないとみるのか、そしてそのいずれにしてもどのような形での結末なのか。つまり、「珠運」と「お辰」は如何になつたのかの詳細については、明らかにみえない。また、「團圓」を主軸にしてのものでもない。

そこで、まずこの結末の解明を試みたい。

結末の解明には、A、芸術道と個人の独立性・自立性による「芽出度」か、B、恋愛成就による「芽出度」か、に着目する必要がある。A、に着目すれば、ア、「珠運」「お辰」ともに独自の道を歩んだ。B、に着目すれば、イ、恋愛は成就しすべて円くおさまる、の解釈の方向が示されよう。以下、具体的に、ア、「珠運」「お辰」ともに独自の道を歩んだ、イ、恋愛は成就しすべて円くおさまる、について考察していく。

ア、「珠運」「お辰」ともに独自の道を歩んだ。

3 回目の「風流佛」は「悟り済した顔」であった。

そもそも「風流佛」が「莊嚴端麗あり難き實相美妙」と見えるのも、「優然として長閑に立る」と見えるのも、「悟り済した顔」に見えるのも、すべて「珠運」の心のありようによって主観的に見えるのではなからうか。その証拠には「莊嚴端麗あり難き實相美妙」の「風流佛」も状況によって「像」「彫像」「木像」「お辰の像」などと表現が変わる。揺れ動いていて、いつも「風流佛」ではない。例えば「浮世のいざこざ知らぬ顔の彫像」「淋し氣に立つ彫像」「しんぼりとせし像」である。苦悩の末、「珠運」の心情がほとんど「煩惱愛執一切棄べし」という段階にまでなっていたから、三回目の「風流佛」は「悟り済した顔」に見えるのである。そして、そのような純粹清澄な心情に高められていればこそ、「お辰」への疑いを克服し、「恨も憎も火上の水」として溶かし救し「一念の誠」をもって信じ愛する愛に高まった時、愛についての悟りがあったのだ。信じ愛しきつたからである。そこに超越したものとの出会いがあり、その時、人は愛の神髄を悟るのだ。信じ愛しつくさなければその境地には到達できない。この感覚は人間の心内部におこる神秘的なものであるから、言語では到底語り得ないものである。また、「珠運」は制作中「人の天真の美」を追求し、無駄なものすべてを除いていった。つきつめていった究極に、「人の天真の美」とは、とりもなおさず愛の心であると自ずから感得するものがあつたのではなからうか。そういうことも純粹清澄な心情に高められる因になっていると考えられる。

「歸依佛」とは愛であつて「珠運」は「一念の誠」をもって信じ愛しきつたればこそ、愛の神髄を悟りえたのである。啓示を受けたのである。それが「御利益」と表現しているものなのではなからうか。「一念の誠」をもって愛しきつた時、「珠運」の「お辰」への恋の思いは高みの愛へと昇華したのである。

このように考えると、

お辰と共に手を携え肩を駢べ悠々と雲の上に行きし⁽⁸⁾

の「お辰」は、それまでの「お辰」ではない。「珠運」の愛の対象は「お辰」という個をはなれている。

ア、否なのは岩沼令嬢、戀しいは花漬賣、⁽⁹⁾

と「珠運」の心情は伏線としてでている。貴族の娘というような身分となった現在の「岩沼令嬢」などはもうどうでもよいのである。「珠運」の心の中には、疑いを克服し、ゆるぎない「一念の誠」の愛をもって信じ愛しきったことによって、悟りによって得た愛、聖なる愛の灯がともされていたのである。この読みを採った場合「雲の上に行」ったということは、

われ人生の旅のなかばに

正しき路を失いて

とある暗き森林の中にありき

神曲 起句

(里見安吉著『ダンテ神曲解説』⁽¹⁰⁾)

というような状態にあった「珠運」がヴェルギリウスに伴われて登っていく道程をたどって浄化され、情念の世界を脱して愛が昇華されたことになるのである。愛着の妄想、「影法師」から脱脚したのである。純粹清澄な心に妄執は生じない。

その愛の灯を胸にして修業の旅へと出発したのである。「お辰」に会う前の「珠運」は「一向専念の修業」をするものであり、「昔の工匠が跡訪はん」と旅に出、「志願を遂ぐる道遠し」という状況にあった。「お辰見ざりし前に生れかはりたし」といっていたように、修業一筋に励む「珠運」になったのである。そして、「吉兵衛を初め」とある

「吉兵衛」は、

横道入らずに奈良へでも西洋へでも行れた方が良い、⁽¹¹⁾

お辰めに逢はぬ昔と諦らめて又候や修業に行て、天晴名人となられ、假初ながら知合となつた爺の耳へもあなたの良評判を聞せて貰ひ度い、⁽¹²⁾

と薦めていた。「吉兵衛」も「珠運」の修業の大成を待ち望むものである。

また「吉兵衛」は、

なまじお辰と婚姻を勧めなかつたら兎も角も、我口から事仕出した上は我分別で結局を付ねば吉兵衛も男ならず⁽¹³⁾

ともいつていた。これもこのア、のように読む伏線である。「珠運」が立ち直れば「吉兵衛」も「男」になれるのである。

この読みをすると、「團圓」の

一村の老幼芽出度とさゞめく聲は天鼓を撃つ如く、⁽¹⁴⁾

が自然に納得できる。「田原」も「七藏」も感動し感化されたのである。「田原」と「七藏」が「御前立」となったというのは何らかの形で旅の手助けをしたのである。「田原」は前に「金圓品物」をもつてきた時、

男らしい思ひ切られたが雙方の御爲かと存じます、併しお辰様には大恩あるあなたを子爵も何でおろそかに思はれませう、されば是等の餽物親御からなさるゝは至當の事、⁽¹⁵⁾

といつていたから、子爵からの饞別を届けるようなかたちで、また姪の「お辰」を辛く遇した「七藏」も「一念の誠」の愛を貰きとおして崇高なまでに高まつた「珠運」の生き方に感動し感化され、以前、「女房に都見物致させかたゞ御近付に」と「室香」のいる京へきたりもしているから、旅のことなどで助力したのではないかと考えられる

のである。このように考えられるのは、「御前立⁽⁶⁾となりぬ」とあるからである。

では、一方「お辰」はどうなったのであろうか。

そもそも「お辰」は美しさや、「しほらしさ」「繊細な身体」「なよやかに」などしとやかな立ち居振る舞いがあ
る。それに加えてしっかりと現実を直視する「利發さ」がある。それは「岩沼」を見た時、「父様か」と父と直感す
る「利發さ」あるいは、

どうぞわたくしめを元の通りお縛りなされて下さりませ、⁽⁷⁾

妾身の上話は申し上兼ねます、⁽⁸⁾

あなたは旅の御客、逢も別れも旭日があの木梢離れぬ内、⁽⁹⁾

すげなく申すも御身の爲、御迷惑かけては濟ませぬ故どうか御歸りなされて下さりませ、⁽¹⁰⁾

などとあつて利發でたくましく強い自立性をもった女性として描写されている。これらの言葉（これらは「珠運」の妄想の中での言葉ではない。）から現実をしつかり見据えて、その境遇に順応して生き抜こうとする女性として人物造型
されている。

「身の上話」をして同情をさそうようなことはしない。しかも、「御迷惑かけては濟ませぬ」と強さと共に他者への
配慮がある。無理難題をいう叔父の「七藏」によく仕えていたように辛抱強く、しかも血縁を大事にする。このよう
な女性像がうかんでくるのである。「岩沼令嬢」となった今、父「岩沼子爵」への配慮、自らがおかれている境遇へ
の認識は十分にしているであらうし、また「子爵」のいつているように

思想の發達せぬ生若い者の感情、追付變つて来るには相違ない⁽¹¹⁾

のように都風になった可能性もあることも考えられる。この見方をすると、「珠連」の手紙に返事がなかったのは、「お辰」の性格から類推すると「すげなく申すも御身の爲」と考えた「お辰」の意思が働いていたと考えられなくもない。この読みの場合は「父上の皆為されし事」は、妄想の中で「珠連」がそう思ったからであるともとれる。

この読みでは「芽出度」と思う人はもつと広がる。それは「岩沼子爵」である。何故なら、「岩沼子爵」と「室香」の関係も「そなたが母の室香が情何忘るべき」「志、七生忘れられず」「大事のく女房」「後妻を貰ひもせず」などにみられるように、一生どころか七生かけての恋であるとしている。ここにも『風流佛』の恋の理念がのべられているのが見られる。「岩沼子爵」は「お辰」を探し続け、その愛娘に対する父としての願いは、

行儀學問も追々覚えさして天晴の婿取り、初孫の顔でも見たら夢の中にそなたの母に逢つても云譯があると、今からもう嬉くてならぬ、⁽²⁴⁾

というものである。この願いが叶う可能性も生じてくる。

「舞踏會」「音樂會」にも連れて行かれ、「學問」をし「都風」になった「岩沼子爵」令嬢は、「團圓」の業平侯爵も程經て、踵小さき靴をはき派手なりボンの飾りまばゆき服を召されたるに値遇せられけるよし。⁽²⁵⁾の女性のような姿をしていたとすると「岩沼子爵」の願い成就は具体性を帯び、これも「芽出度」である。

以上のように「珠連」「お辰」とも自立して夫々の境遇に適した独自の道を歩んだとみえることは、「珠連」に直接関わりのあった人々は「七藏」をも感化し、すべて「芽出度」となる。「さゞめく聲は天鼓⁽²⁶⁾を撃つ如く」には、現世地上のさまざまのことをすべて乗り越えて広まり、人々に浸透していくという意味合いをこめて「一村の老幼芽出度とさゞめく聲は天鼓を撃つ如く」という表現を自然に導き出すものとなる。「芽出度」は「一村」どころか、おそら

く東京在住の「岩沼子爵」や「業平侯爵」にもおよぶのである。

イ、恋愛は成就しすべて円くおさまる。

「お辰」すなわち「岩沼子爵」令嬢が実際に迎えに来た。

「腰元」「お霜」などもついている「子爵」令嬢が、一人での外出は難しいのではと思われるかもしれないが、この場合は、お供が付いていてもかまわない。だから東京から須原まで来られる。

なぜなら、父「岩沼子爵」の許しを得たからである。「粹の父」「岩沼子爵」は十分に一生をかけての恋、否、一生どころか「七生忘れられず」の恋を知っている。そして、実行している人物として造型されている。それは「お辰」に母「室香」のことを話した時にうかがえる。いわば伏線がある。娘「お辰」の一生をかけての恋の心情をよく理解できるはずである。

さらに「岩沼子爵」は「お辰」宛ての「珠連」の手紙も、前近代的家長権、親権の強い風潮のなかで父として娘可愛さの心配のあまり読んだということが考えられる。とすれば「返辭もよこさず」は「父上の皆為されし事」となる。「岩沼子爵」は始めのうちは「思想の發達せぬ生若い者の感情、追付變つて来るには相違ない」と考えていても、度重なる「珠連」の手紙の文面に接するうちに、「珠連」の「一念の誠」をもって貫く愛を読取り、徐々にその心情にうたれていったと考えられる。これには「珠連」がいかに心を尽くして手紙を書き送ったかが「珠連」によって語られているのが伏線となる。

再書濃々と、色好み深き都の人々を幾人か迷はせ玉ふらん御器量の美しさ却って心配の種にて、我をも其等の浮たる人々と同じ様に思し召らんかと案じさふらうては實にく頼み薄く口惜う覚えて、あはれ歳月の早く立てかし、御おもかげの變りたる

時にこそ淺墓ならぬ我戀のかはらぬものなるを顯したけれど、無理なる願をも神前に歎き聞えそろと、愚痴の数々まで記して丈夫そうな状袋を撰み、封じ目油斷なく幾度か打かへし打かへし見て、印紙正しく張り付、⁽²⁶⁾と「かはらぬ」恋の思いをこめ、こまやかな心遣いをして送ったことが記されている。

イ、の読みをとると、「戀に必ず、必ず、感應ありて、一念の誠御心に協ひ、」は「仇し婿がね取らせん」としていた「岩沼子爵」が「珠連」を婿としてもよいと認めたことを意味する。「自が歸依佛の來迎」は父の許しをもらつて「お辰」が迎えに來たことを暗示している。「辱なくも」は華族子爵という特權的門地の「岩沼子爵」令嬢という身分に對しての言い方であり、「雲の上」は身分上のもので、ここでは華族社会の意味となる。前に「地下と雲上の等差口惜し」という表現があつた。「白薔薇香薰じて」は「お辰」が用いていた香水とみる向きもあろうが、「薰」には善に導く、感化する、という意味も含まれている（『大漢和辭典』）。父をも感動、感化させるほどの清純な恋、愛の美しさを形容しているとも考えられる。このように見ると、そもそも、初めに結婚をすすめたのは「吉兵衛」なのだから「吉兵衛を初め一村の老幼芽出度」と「さゞめく」のは当然のことである。「吉兵衛を初め一村の老幼」は、「一念の誠」をもつて貫く恋に感動し、ことの成り行きを聞いて、たがいに「芽出度」とさゞめきあつたのである。「七藏」も感動して感化され、「田原と共に左右の御前立となりぬ。」は「岩沼」家の右腕左腕といわれるような「家従」になつたのである。この読みでも「岩沼子爵」は「芽出度」である。「珠連」は、

心ばかりはミケランジェロにもやはか劣るべき、⁽²⁷⁾

にあるように、西洋芸術に目を注ぐ人物として造型されている。また、

横道入らずに奈良へでも西洋へでも行れた方がよい⁽²⁸⁾

お辰を女房にもつてから奈良へでも京へでも連れ立て行きやれ、⁽²⁹⁾

と「吉兵衛」にすすめられていたこともある。それらからすると、芸術修業に奈良や西洋に、「お辰」ともに行くことも考えられる。とすれば、これも修業と恋愛、ともに初志を貫くことになり「芽出度」である。ア、のような心的成長をとげての「珠運」なら「芽出度」もまさるであろう。「業平侯爵」は「程経て」「踵小さき靴」の女性に「知遇」し、これも「芽出度」である。

加えて「芽出度」はすでになき人々にまで及ぶ。

夢の中にそなたの母に逢つても言譯がある⁽⁸⁾

と「お辰」の父子爵が気にかけていた、一生かけての恋をし実行した「お辰」の母「室香」も、恋を貫き通し「室香」自身は達せられなかった幸せをえた娘に「芽出度」と心から祝うであろう。さらに母「室香」なきあと「お辰」を育て早世した「七藏」の妻「女心の柔なる情ふか」かった「お吉」も、夫「七藏」の身持ちの定まることと、「お辰」の恋の成就とあわせて「芽出度」と喜ぶであろう。イ、の「天鼓を撃つ如く」は現世を離れて宇宙にまでひびきわたり、天上界、あの世にまで及ぶのである。

このイ、の読みは一見、あまりにもめでたく団円の意味「まるくをさまる」(『大漢和辞典』)通りで甘美すぎ俗すぎる感を免れないかもしれない。だが、あれほどむごく「お辰」を遇した「七藏」まで救われて「芽出度」となるのである。そしてあの世にまで救いと「芽出度」が及ぶ。『露團々』にもみられたが、人間にたいして暖かく遇する露伴文芸のありようがうかがえる⁽⁹⁾と考える。

文明開化の時代を考えるとア、もありえるであろう。だが、「お辰」の方は一生貫くという『風流佛』の恋の理念には適応しなくなる。「お辰」は「珠運」の芸術完成への道程における導き手という役割としてのみの存在だったの

かということが考えられてくる。確かに「珠連」は「お辰」との恋を乗り越え心的成長もとげ芸術の道を進めた。だが、「お辰」はそのまま取り残されてしまったままでよいのであろうか。ア、の場合「お辰」のことを気にしすぎてはいけないが、『露團々』にも不幸な人々や、善くないことをしてしまう弱い人間にたいして暖かく遇する姿勢がみられた。『風流佛』においても「七藏」をもすくっているのである。まして「お辰」を単に「珠連」の芸術のため、悟りのための導き手としてのみの存在だけに扱っていることはないと考えられる。「お辰」もすくわれなければならぬ、幸せにならなければならないのではなからうか。

そう考えると、イ、は、恋の理念も貫け「お辰」も幸せになり、多くの人々が「芽出度」と祝い、天上界、あの世にまでもその余波が及ぶと考えられるのである。

以上ア、イ、が「芽出度」に拘泥した読み解きの結果である。この結末はその後の展開の道程として看過することができないと考える。

註(1) 幸田露伴著『風流佛』『新著百種第五號』吉岡書籍店版 名著復刻全集 近代文学館 昭和四三年十二月十日 百十四頁

(久しく削除されていたが、『風流佛』【幸田露伴集 新 日本古典文学大系 明治編 一二】二〇〇二年七月二十四日第一刷発行 岩波書店には入っている。一二四頁)

(2) 山口剛校訂『風流佛』【明治文学名著全集第貳篇】 大正十五年九月十日 大正十五年十月二十五日再版発行 東京堂 二〇六頁〜二〇七頁

(3) 笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』昭和三十三年一月十月初版発行 平成三年六月二十日六版発行 明治書院 六八九頁

(4) 笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』前掲書 六九一頁

(5) 柳田泉『解題』【幸田露伴集 明治文学全集二五】昭和四十三年十一月二十五日第一刷発行 筑摩書房 三九五頁

(6) 河盛好蔵『幸田露伴集解説』【幸田露伴集 日本近代文学大系第六卷】昭和四九年六月三〇日初版発行 角川書店 一九

頁

- (7) 登尾豊『露伴登場』『幸田露伴集 新 日本古典文学大系 明治編 二二二』解説「前掲書 五二九頁」
- (8) 『露伴全集』第一卷 七七頁
- (9) 『露伴全集』第一卷 五八頁
- (10) 里見安吉著『ダンテ神曲解説』一九六五年二月一日発行 山本書店 一三頁
- (11) 『露伴全集』第一卷 六七頁
- (12) 『露伴全集』第一卷 六七頁
- (13) 『露伴全集』第一卷 六二頁
- (14) 『露伴全集』第一卷 七七頁
- (15) 『露伴全集』第一卷 五九頁
- (16) 「御前立」は御前駆、さき立ち。岡保生注（『風流佛』『幸田露伴集 日本近代文学大系第六卷』昭和四九年六月三〇日初版発行 角川書店 八三頁。七藏・田原は発心して風流仏の守護役となった（仁王像のように）。関谷博校注『風流佛』『幸田露伴集 新 日本古典文学大系 明治編 二二二』前掲書二二四頁）
- いずれにしても助けることになる。
- (17) 『露伴全集』第一卷 四二頁
- (18) 『露伴全集』第一卷 四四頁
- (19) 『露伴全集』第一卷 四四頁
- (20) 『露伴全集』第一卷 四四頁
- (21) 『露伴全集』第一卷 五九頁
- (22) 『露伴全集』第一卷 五六頁
- (23) 『露伴全集』第一卷 七七頁
- (24) 帝釈天が住む初利天の善法堂にあるという鼓。打たなくとも自然に妙音を発し、聞く者に悪を慎ませ、善を好ましめる、という。風流仏来迎に対して皆のあげる歓呼の声が、この天鼓のように、七藏を感化する。関谷博校注『風流佛』『幸田

露伴集 新 日本古典文学大系 明治編二二 前掲書 一二三四頁

(25) 『露伴全集』第一卷 七五頁

(26) 『露伴全集』第一卷 六〇頁

(27) 『露伴全集』第一卷 六七頁

(28) 『露伴全集』第一卷 四九頁

(29) 『露伴全集』第一卷 五六頁

(30) 『露伴全集』第七卷 岩波書店

雑誌『都の花』の明治二十二年二月下旬號から載り、(略)翌二十三年十二月金港堂から刊行せられた。〔『露伴全集』第七卷 昭和二十五年十一月第一刷発行 昭和五十三年八月第二冊発行 岩波書店後記による〕。

『露團々』『風流佛』はキリスト教的ヒューマニズムに満ちた作品である。としている。(遠藤祐他編『キリスト教文学事典』一九九四年三月一日発行 教文館による)。

『露團々』の「ぶんせいむ」は「人世の不幸の極點に達したる人々の不幸を愈やし救はん」と不幸の人々に目を注いで旅に出たとしている。また「ぶんせいむ」は娘「るびな」の婿を広告によって募集し、試験をして選ぶという方法をとった。その試験に「吟蝟子」を替え玉として送るということをした「田亢龍」も終りに至って「温順の人となり、父の官を繼ぎて栄えしとなり。」としている。「るびな」は試験を乗り越えて恋をつらぬき、最後に多くの人々に祝福されて「しんじあ」と結婚する。(要約岡田)

なお、『露團々』については拙稿「幸田露伴『露團々』考——露伴とキリスト教の関連と、『露團々』の愉快観、恋愛観の根底にあるキリスト教的思想の考察——」『日本文藝研究』第五十一卷第一号、「幸田露伴『露團々』考——風流観をめぐって——」『日本文藝研究』第五十二卷第一号を御参照下さい。

二、一夫一婦の倫理観において

次に、「團圓」本文は「行し後」のさらにあとに、「其後」と続いているのに注目したい。

「團圓」については、

露伴の団円はいかにも取つてつけた感がなくもないのである。(1)

と感じているのがみえるが、「團圓」特に「其後」以降がそれまでの本文にそぐわないものが感じられることは事実であろうと考えられる。

その一つの理由として、俗世の情念の世界から脱して昇華した世界になるからという見方もできよう。だが、それだけではあるまい。

本文「第十 下 戀戀戀、戀は金剛不壊なるが聖」に続けて、冒頭に

虚言といふ者誰吐そめて正直は馬鹿の如く、眞實は間拔の様に扱はる、事あさましき世ぞかし。男女の間變らじと一言交せば一生變るまじきは素よりなるを、(略)(2)

と『風流佛』の恋の理念と、近頃の世情批判が示されているのがみえる。

男女の間は、変わらないと一度誓ったら一生変わらないのが当然であり、この場合、変わらないというのは、男女の間で誓い合った愛のことであると解釈できる。

一方、日本の社会では夫は正妻の他に妾というものがあっても、それは男の甲斐性として、或いは家の跡継ぎの問題があるからなどとして暗に認められていた。つまり夫婦は、特に上流富貴階層では一夫数婦のような形態が公然と許されていたということである。長く続いてきたそういう風潮が明治になったからといって、一気に払拭されるものではないことは、歴史をみても明瞭である。

このように一夫数婦が公然のように許される社会の中にあつて『風流佛』は、一生かけての変わらぬ恋を理念とする。上流階層の「岩沼子爵」をも「大事のく女房」「後妻を貰ひもせず」などにもみられるようにその理念を貫い

ているとして造型しているのである。

「珠運」の手紙という設定の中に

あはれ歲月の早く立かし、御おもかげの變りたる時にこそ淺暮ならぬ我戀のかはらぬものなるを顯したけれ^③とあったが、これは男女の間で年老いて若い時の美しさや力強さはなくなっても、一生変わらずに愛の思いが続くということを現している。

「珠運」「お辰」のような若い男女間についての「變らじと一言交せば一生變るまじきは素より」という恋の理念は、その恋の延長線上にある恋の結実の結婚をとおして夫婦間へとつながる。つまり、「男女の間變らじ」は夫婦の間變わらじとなる。その場合、夫婦という男女の間において一方が複数になるとき、例えば一夫数婦のような形になる時、一生變わらない「一念の誠」をもって信じ愛していると云えるであろうか。「一念の誠」をもって信じ愛していくことができるであろうか。なぜなら、一方が複数になるとき「變らじ」の關係は何らかの変化をするのではないであろうか。とすれば、『風流佛』にいう「男女の間變らじと一言交せば一生變るまじき」の恋の理念は、とりもなおさず一夫一婦の夫婦のありようの理念につながるものとなる。

日本における夫婦のありようについては、天文一八年（一五四九）来日し、日本にキリスト教を伝えたザビエルの書簡抄『聖フランシスコ・デ・サビエル書簡抄 下巻』^④に「二人の男は一人の妻しかもってほならない」と説いていたことに対する日本人々の反応が記されているのが見られるが、このように一夫一婦を説くことを珍しいことのように聞いたらしい。つまり、夫婦間はややふやな形態のままで別にとりたてて考えられることではなかったといえる。この曖昧さによって被害を被るのは、恐らく女性のほうが多かったと考えられる。

こういう風潮が続いてきた中で、明治二十二年日本キリスト教婦人矯風会による一夫一婦の建白があったことが、

『日本キリスト教婦人矯風会百年史』⁽⁵⁾に見られる。

一夫一婦の建白⁽⁶⁾

八百余名の署名連印

一八八九（明治二二）年のメイン・イベントは、一夫一婦の建白書を元老院へ提出したことである。⁽⁷⁾

とあり、その建白書はまだみつかつていないとして、

建白活動の中心人物だった湯浅はつ（矢島姪）が『女学雑誌』一六一号（明治二十二年五月十一日 岡田記）に寄稿したものが建白書の内容をあらわすものであるから掲げておく。⁽⁸⁾

としてあるなかに、

倫理の基の要旨

一 夫数婦の弊を救ふの第一法は基督教によるにあり、略し只基督教は一夫一婦を主張するものなれば必ず之によりさる可らず。⁽⁹⁾
一 男子四人の妻を有するを許されたる亜刺比亞人すら近頃は一夫一婦に満足し、一夫数婦を制とするモルモン宗も米国政府より公然一夫数婦の制を取ることを厳禁せられたり⁽¹⁰⁾

と記されているのが見られる。『風流佛』初出は同年すなわち明治二十二年九月吉岡書籍店発行の新著百種第五號である。『風流佛』本文の、

若又過つてマホメット宗モルモン宗などの木偶土像などに近づく時は、現當二世の御罰あらたかにして、光輪を火輪となし一家をも魂魄をも焼き滅し玉ふとかや。⁽¹¹⁾

という表現には、前記(10)建白書の内容の

亜刺比亞人すら近頃は一夫一婦に満足し、一夫数婦を制とするモルモン宗も

の影響があるのがみられるのではなからうか。亜刺比亞人をマホメット宗にしているのではなからうか。そしてとも

に、一夫一婦を推奨しているものなのである。「木偶土像などに近づく」は一夫数婦になることを比喻していて、一夫一婦による「子孫繁昌家内和睦」に対して、一夫数婦による弊害を述べているのである。日本キリスト教婦人矯風会によるこの建白が『風流佛』になんらかの影響があったのではないかと考えられる。

露伴とキリスト教との関連については、柳田泉氏がその著『幸田露伴』のなかで、

露伴の不在中（北海道に赴任中岡田記）、何ういふ切掛けからか、下谷教會を預かつてゐた若い植村正久師の説教を聞いて頗る感激し、先祖代々の佛教（法華宗）信心を抛擲して猛烈な基督教信者になつてゐた。¹²²

と父成延氏をはじめとして一家（露伴をのぞいて）がキリスト教の信者になつてゐたことを記している。

柳田泉氏著『幸田露伴』は露伴の生前昭和十七年二月十二日発行である。その序語に

さて、此の書を露伴傳とはいふものゝ、それは世にいふ評傳といふ性質のものではない、見方によつては、傳記資料といふにちかいかも知れない。わたし自身の目的からいへば、能ふ限り公平な、すらすらとした、先生の文學的作品や人物を理解する上に幾分でも多く助けとなるやうなものを書きたいといふのであつた。露伴先生は七十五の高齡ながら、現に元氣で讀書執筆をされてゐることであり、

と『幸田露伴』執筆にさいしての柳田氏の姿勢と、執筆当時、露伴が健在であつたことが記されている。さらにへん構への一つとして——略——自分で勉強して資料を拾蒐し——たが

肝心のところでどうにも資料が足りなかつたり、作品に分らない點が出て來たり、資料そのものに疑點があつたりして、結局、度々先生に御面倒をかけることになつた

とも記している。

先生の直話中、本文を訂正すべきもの、追補すべきものは、附録（二）として巻尾にのせてあるから、これは、是非とも本文と併せて讀まれたい。（略）

とあり、こういう姿勢で書かれ、しかも露伴生存中に発行されているので、違ふ事は訂正されたであろうから、信用できるものであると考えられる。

柳田氏による明治二十年頃の露伴の環境からみると、露伴にキリスト教の影響¹³⁾がなかったとはいえないと考えられる。したがって建白のことも直接の関わりはなくとも、キリスト教の關係していることではあり、前記のような家庭環境の中にあつて、話題にも上り聞いていたことは考えられる。

因みに露伴の次女文氏は、その著『みそつかす』¹⁴⁾で次のように記している。

植村氏はのちに父の再婚の式を司り、私に洗礼を与える牧師であるから、妙なめぐりあわせである。

露伴の再婚は、一九二二年十月、植村氏は一九二五年没、文氏は一九〇四年生れ、露伴は一九四七年没、そして『風流佛』初出は明治二十二年（一八八九）である。文氏らによつてうかがえる幸田家の家風からして、父露伴の許しがなく二十歳くらいより前の娘文氏が洗礼を受けるといふことはないのではないかと考えられる。これらのことから露伴とキリスト教との關係は続いていたのではないかと考えられる。

キリスト教の新約聖書には

元始に人を造り給ひし者は之を男女に造れり 是故に人父母を離れて其妻に合二人のもの一體と為なりと云るを未だ讀ざるか

然ばはや二には非ず一體なり神の合せ給へる者は人これを離すべからず

婚姻の事を凡て責め

とあつて一夫一婦を説く拠り所が示されている¹⁵⁾。

このように見てくると、『其後』以降において『風流佛』の世界はそれまでの情念の世界から一転して、当時の世情を反映し、しかもキリスト教的倫理觀の影響のある世界へと移行しているのである。次元を異にするから「團圓」

がへいかにも取つてつけた感^セじにもなるのではなからうか。

四回目の「風流佛」は移行した世界に、見えるのである。

この「風流佛」は「所々に」見え、しかも夫々の境遇にふさわしい配偶者、それも女性の姿、妻の姿として見えるという。本文はさらにそれを「一切經にもなき一體の風流佛」と表現している。「一切經^ニにもな^シ」^一というのだから仏教のものではないといえる。因みに様々な姿に見えることから、觀世音菩薩の三十三身普門示現が想起されるが、そこでは男性の姿にも現じていて、女性の姿ばかりではない。

そして、四回目の「風流佛」を拝んだ者は「一代の守本尊と」するという。

実は四回目の「風流佛」とは実体がなく、愛の心を象徴しているものではないであらうか。だから、これを現実の夫婦の場合にあてはめれば、「一代の守本尊と」するということは、いつも愛の心を持つてことになる。愛の心を互いに持ち続けているということは、「一念の誠」の愛と信の上に成立する一夫一婦の夫婦のありようの基となるものである。そういう夫婦には「御利益」として「子孫繁昌家内和睦」の一家の繁栄がもたらされるとしているのである。

建白書に

一家は一国の基なるを以て一家の不平攪乱は一国にもその關係を及ぼすなり^切

とあるが、露伴にも一夫一婦による家庭の繁栄は、国家の繁栄につながるものという考え^圖が含まれていたのではないかということも考えられる。

一五五頁

(2) 『露伴全集』第一卷 七〇頁

(3) 『露伴全集』第一卷 七五頁

(4) 訳者ベトロ・アルーベ、井上郁二「聖フランシスコ・デ・サビエル書簡抄 下巻」一九四九年七月一〇日第一刷発行 一九九一年一月二〇日第四刷発行 岩波文庫 一〇三頁

(5) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』一九八六年二月六日 第一刷発行 日本キリスト教婦人矯風会編 ドスメ出版 六二―六五頁

なお、『日本キリスト教婦人矯風会』は、一八八六（明治一九）年二月六日に創立された。当時の日本は近代国家建設の途上にあつたが、その根底には古い封建時代の因習が根深くのこつており、女性と子供の人權はなきにひとしいものであつた。けだし、日本の矯風会が禁酒運動と婦人運動との二本立てになつたゆえんであり、東京の日本橋教会で発会式を挙行するや、その翌年には男女の貞操問題を決議、二年後の一八八九年に一夫一婦の請願、九二年に海外売春婦の請願と、やつきばやの活動を展開する原動力となつた。（『日本キリスト教婦人矯風会百年史』「刊行にあたって」より抄）

(6) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』前掲書 六二頁

(7) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』前掲書 六二頁

(8) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』前掲書 六二頁

(9) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』前掲書 六四頁

(10) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』前掲書 六三頁

(11) 『露伴全集』第一卷 七八頁

(12) 柳田泉『幸田露伴』昭和一七年二月一二日 中央公論社 五七頁

(13) 露伴とキリスト教との関連については拙稿「幸田露伴『露伴』考——露伴とキリスト教の関連と、『露伴』の愉快観、恋愛観の根底にあるキリスト教的思考の考察——」『日本文藝研究』第五十一卷第一号を御参照下さい。

(14) 幸田文『みそつかす』一九八三年九月一六日第一刷発行 一九九七年四月一五日第二四刷発行 岩波書店 五六頁

(15) 関谷博校注『風流佛』には「風流仏は一夫一婦制の仏なのである。」としている。

【幸田露伴集 新 日本古典文学大系 明治編二】二〇〇二年七月二四日第一刷発行 岩波書店 二三五頁

(16) 露伴は「一切經の傳」で「一切經とは、佛經中の、經、律、論、秘密、雜の五藏を合せ稱するものにて、へ略へ殆んど網

羅包括して剩すところ無ければ、へ略へ」と言及している。【露伴全集】第十五卷 三二頁

(17) 【日本キリスト教婦人矯風会百年史】前掲書 六四頁

(18) 後のことではあるが露伴は「他面には夫婦の愛、そこから生物は繼紹して行くのである。へ略へこゝに世界の組織だつて繁榮し、人間の慈恵して行く妙作用が運ばれるのである。へ略へ愛によつて社會も發達し、國家も隆昌なるに至るのである。」と記しているのがみられる。

【愛】【露伴全集】第二十五卷 昭和三十年四月二十五日第一刷発行 昭和五十四年五月十八日第二刷発行 岩波書店 六六頁

ま と め

初出時、肉食頭陀（石橋忍月）は、

- 1 殊に其結末に至り珠連は如何お辰は如何なりしや
- 2 其臍氣中に如何なる妙味あるや熟考未だ著者の真意匠を思ひ出たさゞればなり、
- 3 著者若し吾人の不敏を憐まば請ふ團圓の「歸依佛御利益」を詳説せよ

「國民之友」六五號 明治二十二年十月十二日

と批評していた。1、「珠連」「お辰」の恋がどうなったか不明である。2、それにつれてへ著者の真意匠へが不明である。3、前記1、2、において團圓の「歸依佛御利益」を詳説してほしいといっていた。つまり、『風流佛』という作品は、1、2、3、が不明なままなのが不足なのだとしているのである。本稿はこの忍月の評が正鵠を射ているか否かの解明を試みたのである。

その結果、

1、へ珠連は如何お辰は如何なりしやへは、イ、であるとする。以下、イ、とする理由を述べる。

ア、の読みも捨てがたい。なぜなら、人生において通過せねばならない恋というものに伴う迷いから脱却し、聖なる愛へと昇華する愛の神髄を「珠連」がえる、悟ることができたということも、人間の成長過程の道程として立派な見事なすばらしいことであり、そのようになったのは尊く有難いことであると考えると捨てがたい。

だが、このア、では「お辰」はいわば「珠連」を悟りへと誘う道具のようなものになってしまふ。さらに「お辰」は「追付變つて來た」ことになり『風流佛』の一生変わらないという恋の理念からも外れてしまふのである。露伴作品の中でキリスト教的ヒューマニズムに満ちた作品として『露團々』と『風流佛』があげられているのであるが⁽¹⁾、『露團々』では「るびな」と「しんじあ」は試練を信と愛によつて乗り越え、恋愛成就から多くの人々に祝福される結婚という結末をとっている。さらに「ぶんせいむ」の旅にも、不幸な人々を救うという目的があるとする視点がみられるとともに、悪をおかしてしまふ弱い人間へ暖かい目が注がれているのがみられた⁽²⁾。『風流佛』でも「お辰」にむごくあたっていた「七藏」をもすくっているのである。だから『風流佛』において、道具だけにつかわれることになるような「お辰」の扱い方はししないと考えられる。その「お辰」にとつては榮譽富貴の華族となるよりも、「一念の誠」の信と愛によつて貫く恋が成就する事のほうが『風流佛』の恋の理念からすると幸せとみるべきである。とすると、『露團々』の結末と同様に、「珠連」「お辰」は恋を貫き恋愛成就し「芽出度」と多くの人々に祝福されて、結婚したとみるのが『露團々』『風流佛』二作品に共通する展開として合致し、あわせて『風流佛』の恋の理念にも適合すると考えられる。このような理由でイ、であるとするのである。このイ、の結末があることが一夫一婦に言及することにつながり、さらに次の2、へ真意匠への説明へとつながり、3、のへ「歸依佛御利益」への説明につながる

ものとなるのである。すなわち、

2、〈著者の真意匠〉は、東洋的浪漫主義世界ともみえる作品を、キリスト教的倫理観を根底とする、一夫一婦のありようの推奨ともいえるものを包含させ、社会への提唱へとつながるものとする趣向にみられる。

3、〈「歸依佛御利益」〉は、ア、の場合は啓示をうけ愛の神髄を感得することである。イ、では、一夫一婦の誠の愛の上に成立する夫婦にもたらされる「子孫繁昌家内和睦」の幸福のことである。それには国家の繁栄につながるものであるということも、暗に含まれていたのではないであらうか。

以上のように、「團圓」に着目して読むと忍月がわからない、不足だとして批評していたことが明らかに見えてくるのである。著者は「團圓」で説明しているのである。著者の緻密な構成は「團圓」に説明を用意しているのと同じといえよう。したがって、不足だとする忍月の批評は正鵠を射ていないといえよう。しかし、一方、不明な所に何かあると感じ、問題を提起したとすれば、鋭い批評家だといえよう。

作者の意図が「團圓」にこめられているのではなからうか。「團圓」の意義、特に「其後」以降の意義は重いと考える。

以上のように、「團圓」の二つの表現に着目して読むとき、「團圓」の意義は重く、「團圓」に作者の意図がこめられているといえる。

そして、『風流佛』は、キリスト教の影響のある作品であるといえよう。なぜなら、一夫一婦はキリスト教の倫理観に基づくものであると言えらるからである。

笹淵氏は、

露伴の西欧的なものの摂取の仕方は極めて同化的であつて、換骨脱胎の妙を得てゐるために、ともすれば炯眼な批評家すらその本源を認めえないことが多いのである。⁽³⁾

と指摘されているが、キリスト教についても同じである。

『風流佛』へのキリスト教の影響もかくれていて表には出ていないといえる。

変わらないと誓つた若い男女の恋愛成就是結果として結婚へとつながるものであり、夫婦間において変わらぬ愛を一生持続しようとするれば、その形態は一夫一婦でなければならぬと考えられる。『風流佛』創作当時、日本キリスト教婦人矯風会による一夫一婦の建白があつたが、『風流佛』はこういう社会の趨勢をとりいれているものであつて、露伴には一家の繁栄は国家の繁栄につながるといふ思いもあつたのではないかと考えられる。

古い封建時代の因習が根深く残っている当時の社会における女性や、社会風潮をもみすえて、「團圓」において一夫一婦の夫婦のありようの推奨を社会に提唱しているのではなからうか。そこに日本の近代国家建設の途上に生きる青年としての、作家露伴の使命感がこめられていたのではないであらうか。

それゆえに「團圓」において、『風流佛』は、教訓、教養、啓蒙、寓意小説ともいえる要素を含んでいるといえるのではないかと考えられるのである。

それらを包含しつつ『風流佛』はへ妙味佳香言ふ可からず」と評される価値ある文芸作品なのであるといえよう。

註(1) 遠藤祐他編『キリスト教文学事典』一九九四年三月一日発行 教文館

(2) 一、「珠連」「お辰」の恋の解明においての註(30)を御参照下さい。

(3) 笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』昭和三年一月初版発行 平成三年六月六版発行 明治書院 六七六頁

*『風流佛』本文は『露伴全集』（第二次）第一巻 昭和二十七年十月三十一日 第一刷発行の昭和五十三年五月十八日 第二刷発行 岩波書店を用いた。

*なお『風流佛』『新著百種』第五號 吉岡書籍店版 昭和四十三年十二月十日発行 名著複刻全集 近代文学館を参照した。

*聖書引用は『近代邦訳聖書集成』③、『新約全書』明治十三年 日本横濱印行 一八八〇年原本発行 一九九六年四月 ゆまに書房を用いた。

*旧字体など適宜改めた場合もある。